日本光学会 平成12年度年次報告

1. 総　　括

日本光学会幹事長　岩田　耕一

日本光学会は，出版活動と講演会・講習会を中心として，光に関連する科学と技術の進展をはかるための情報の交換と啓蒙を行っている．

出版では，会誌「光学」を月刊で，英文論文誌“OPTICAL REVIEW”を隔月刊でそれぞれ発行した．その報告はこの総括の後に掲載されている．

講演会と講習会については，ほぼ例年どおり行われた．第25回光学シンポジウムは，「光学システムおよび光学素子の設計，製作，評価を中心として」のテーマのもと，2000年6月22日，23日に東大生研で行われた．講演数31件，参加者268名で盛況であった．第34回サマーセミナーは，「世の中を変える光技術」というテーマのもと，2000年8月24日～26日に，上智大学の軽井沢セミナーハウスで行われた．参加人数は52名と多くなかったが，イブニングセッションでは，各種展示や実験などがあり，夜遅くまで盛り上がって参加者に好評であった．Opitics Japan 2000は，2000年10月7日，8日に北見工大で行われた．応用物理学会の日程とは約1か月ずれていること，場所が遠隔の地であることなどから，参加者の確保が心配されたが，最終的には313名の参加を得て，プレナリー講演，受賞講演，一般講演，ポスター講演を含めて190件の発表が行われ，日本光学会の会員のこの集まりに対する期待を感じることができた．招待講演者との昼食会や光学の将来を議論するナイトセッションなどが試みられた．第27回冬期講習会は，「フォトニック結晶と極微周期構造の光学」のテーマのもと，2001年1月15日，16日に行われた．タイムリーな企画であったため，参加希望者が多く定員を超え，最終的には参加者が115名となった．この他，光学五学会関西支部連合講演会（2000年5月26日島津製作所大阪支社と2001年2月9日立命館大大阪オフィス），カラーフォーラムJAPAN 2000（2000年11月15～17日，工学院大），関西講演会（2000年12月18日，大阪大），名古屋講演会（2000年12月11日，岡崎国立共同研究機構）など多彩な活動が展開された．また初めての試みとして北陸信越講演会（2000年11月1日，新潟大）も開催された．

学会の活性化と活動範囲の拡大は，研究グループの活動に負うところが大きい．本年度は，光波ミキシング研究グループが発展的に解消し，新しく光波シンセシス研究グループが発足した．従来から引き続いて活動を続ける研究グループと合わせて，10の研究グループがそれぞれ活発な活動を行っている．

日本光学会は2つの賞を設定している．ひとつは30歳以下の若手の研究者の育成を目指す光学奨励賞である．通常2人の受賞者が選ばれるが，本年度は，有本英伸氏（コネティカット大）1人であった．若手研究者の「光学」と“OPTICAL REVIEW”へのいっそうの投稿を期待したい．また，光学論文賞の受賞者は，広い範囲の連続波長可変半導体レーザーを可能にした興梠元伸氏（東工大）と，色順応における恒常性のずれについての提案と実験を行った栗木一郎氏（科学技術振興事業団）である．

2002年には，日本光学会が光学懇話会として発足して，50年を迎える．そこで，これを記念して2つの事業が計画されている．ひとつは，「光学」の2002年4号を50周年特集号とすることである．この号は，CD-ROMを付録として，より充実した記念号とする予定である．現在，光学50周年記念特別編集委員会のもと，広い範囲の方々に特集記事などを依頼するなど，準備が進展している．また，2001年のOptics Japanを50周年の記念大会とすることが決定され，海外の学会からの招待講演などが用意されている．現在，日本光学会の財政状態は健全に推移しているので，記念事業については，特別予算を組んで対応することにした．

学会の中心となるべき場所がないという不便を解消するべく，応用物理学会の本部の近くに一部屋を借り，日本光学会資料室を設けた．ここには，各種出版物のバックナンバーや議事録などを保存しておくとともに，20人以下の会議を開けるようなスペースを確保した．現在は，常任幹事会を中心に会議がもたれているが，研究グループなどに活用していただきたいと考えている．

学会の国際化と情報化は大きな課題である．この方向に向けてもいろいろな動きが生まれている．まず，“OPTICAL REVIEW”の編集業務を，現在の学会事務センターから，2002年1月に物理系学術誌刊行協会（Institute of

Pure and Applied Physics: IPAP）へ移行することが幹事会で了承された．これは，応用物理学会のJJAPと日本物理学会のJPSJの2誌とともに，電子出版やインターネットを利用した編集を行うための第一歩である．これによって，OPTICAL REVIEWがアメリカ，ヨーロッパと並んで，アジアにおける光関係の学術誌の中心となることを目指している．国際協力に関することとしては，日本学術会議の光学専門委員会から，日本光学会が国際光学委員会（International Commission for Optics: ICO）に加盟することと，日本光学会主催で2004年にICOの国際会議を開催してほしいとの要請があった．ICOは光学界の国連と考えられ，国単位で参加することになっていて，現在，日本は光学専門委員会が窓口となっている．最近，その規約が改正され，各国の光関係の学会も加盟できるようになったので，日本光学会も加盟可能になった．幹事会で協議し，参加申請を決定した．国際会議開催についても開催の方向で話し合いが進んでいる．また，韓国光学会（Optical Society of Korea: OSK）から，交流協定を結ぼうとの提案があった．この協定書について，幹事会において検討を加え，最終案を承認するまでに至っている．

国際会議の開催も相次いでいる．光設計研究グループによる国際会議（2nd International Conference on Optical Design and Fabrication：ODF 2000）が，2000年11月15日～17日に東京で開催された．また，第2回目のSPIEと共同主催の国際会議（2001 International Conference on Optical Engineering for Sensing and Nanotechnology: ICOSN 2001）も2001年6月に横浜で開催される．また，微小光学研究グループによる国際会議（The 8th Microoptics Conference: MOC '01）が，2001年10月に大阪で開催される．

上に述べたように，国際化，情報化をはじめとして，世の中は大きく変化しようとしている．まして，進歩の激しい光に関する科学と技術を取り巻く情勢の変化はより著しい．そこで，日本光学会の将来像を広く会員の内部で議論し，その見通しを立てるため，将来計画ワーキンググループを設置することになった．2001年の末あたりまでに協議を尽くし，日本光学会のビジョンを答申する予定である．

2. 編　　集

「光　　学」

前編集委員長　大坪　順次

「光学」に掲載された原著論文（研究，研究速報，技術報告）は，1999年度に一時的に15件と落ち込んだが，2000年度は27件で，今年に入ってからも順調な原著論文の投稿状況であり，心配したような長期減少傾向があるわけではなかった．原著論文の取り扱いについては，OPTICAL REVIEWの順調な発行状況もあるため，いつも編集委員会では話題になる．日本語の原著論文は，企業のようなお忙しい方が短時間で論文をまとめるためにも残しておいて欲しいという要望などもあり存続しているが，実際には最近増加している大学院博士課程の学生からの投稿が多いようである．これは，あと1つ論文が欲しいというときに，書くほうとしても日本語で短期間に書けること，そして発行までの期間が最短では4か月，平均でも6か月以内と短いことが理由であろう．論文の質としても一定レベル以上であり，日本語であることと発行までの期間が短いことは必ずしもレベルの低下を意味しているものではない．これまで，「光学」の原著論文の査読者は1名で，掲載不可の判断が出ると2人目の査読者に判断してもらうという査読システムであった．昨年度からは，分野ごとに編集委員を主とするトピカルエディター制を敷き，査読者も最初からグローバルスタンダードの2名としている．

今年度からは，原著論文のみならず，解説記事などもアブストラクトを英語，日本語で書いていただき，「光学」のWebを充実させるためにこれを順次掲載する予定である．今後，OPTICAL REVIEWのオンラインジャーナル化を含み，「光学」誌の電子化をどのようにしていくかが課題である．また，昨年度からは2年計画での講義シリーズも始まり，さらに特集号記事とは直接関係のない飛び込み記事という分類を設け，1号あたり1編程度を載せるようにした．「光学」はここ10年ほど特集号ということで運用をしてきており，それが定着している．しかし，重要ではあるがなかなか特集を組みにくい分野，あるいは速報性のある解説記事など機動性に欠ける点があった．そのため，号担当以外の委員からの提案もできる飛び込み記事という分野を作り，これらの問題点の解消を計ることにした．通常，企画から発行まで1年以上かかっている編集作業が，飛び込み記事の場合には，6か月程度で掲載されている．これらの点については新しい試みであり，会員のご意見をいただきたい．

2002年は，日本光学会創立50周年に当たるため，2002年4号を「光学」の記念特集号として発行する予定である．このため，伊藤雅英氏を委員長として編集委員以外の方にもご協力をいただき光学50周年特別編集委員会を発足させ，現在その作業が順調に進んでいる．1982年4号に光学30周年記念特集が組まれており，特集号ではその後の

20年の光学界の進展と，今後の展望を俯瞰する予定である．また，光学の発展やこれまでのデータなどをまとめた記念のCD-ROMを合わせて作り，会員にも配布する予定であり，ご期待いただきたい．

昨年度は，2度にわたり会誌の発行が遅れ，会員の皆様にはご迷惑をおかけした．編集員会としては精一杯やっているつもりであるが，原稿の遅延などにより発行が遅れた点については反省し，今後の対策として責任の所在を明らかにするとともに，編集委員会作業の見直しを行った．このため，編集局に依頼できることは依頼し，編集委員会で責任をもつ部分を明確にした．また，これから原稿執筆のご依頼申し上げる方々には，期日厳守をご協力いただくことを改めてお願いしたい．「光学」は，先に述べたように従来に比べページ数も増加しており，編集局への編集依頼作業も増える傾向にある．このため，編集委員会として作業に見合う編集費の増額を幹事会にお願いしており，この場で会員の方々にもご理解いただきたい．

「OPTICAL REVIEW」

編集委員長　一岡　芳樹

2000年はOPTICAL REVIEW発刊7年目である．1994年末の創刊以来2000年末までの総掲載論文数は702編で，採択率は74%である．

2000年度の投稿論文数は90編，掲載論文数は98編であった．前年度に比べ投稿数で9編の減少，掲載論文数で6編の増加である．本年度の掲載論文の内訳は，review paper 10編，regular paper 70編，letter 15編，short note 1編である．2000年度は，Optical Tomography and Topographyの特集企画を行い13編の論文を掲載した．本年度の特徴は外国からの投稿件数が25編と昨年に比べて3倍以上となったことである．特にアジア・中近東の国々から16件の投稿があった．このことは，本誌が国際的にも認知されつつあることを反映しているもので歓迎されることである．

分野別の掲載論文数も時代を反映して特定分野だけでなく幅広い分野にわたって平均化されてきた．光が幅広い分野で必要とされるようになってきたことを示すものであろう．分野別に多い順に列記すると，Photonics and OptoelectronicsとOptical Systems and Technologiesが14編，Lasers 12編，Nonlinear OpticsとEnvironmental, Biomedical and Space Opticsが9編，Information Optics 8編，General and Physical OpticsとVisionが5編，Far Infrared and Short Wavelength Optics 4編，Quantum Optics and Spectroscopy 3編，Optical Materials and Manufacturing Technologiesが2編であった．先端科学技術の進展とともに光を利用する分野が拡大し，複合分野の研究が増えてきたので従来のスキームを一新することも今後検討する必要があろう．

OPTICAL REVIEWは応用物理学会から出版されている光関連の国際学術誌である．創刊にあたって，国外の光関連の国際誌に流れている日本の原著論文の4分の1程度が吸収できればという意気込みでスタートしたが，後発であるため特色を出す必要があった．初代伊藤編集委員長の方針であった，投稿から出版までの時間短縮を目玉にし，当初からJJAPと同様責任編集委員制度をとっている．最近は外国他誌も結構時間が短くなっているのでさらに新たな特徴をだす必要がある．本誌の広報活動として2000年度から「応用物理」に本誌の目次が掲載されるようになった．また，インターネットのホームページを開設し，各号の内容のアブストラクトを掲載している．

2000年4月，米国，ヨーロッパに対峙して，アジアから第3の物理系情報発信機能を果たす組織として，応用物理学会と日本物理学会が協同した「物理系学術誌刊行協会」が発足した．この対象学術誌としてOPTICAL REVIEWも入っており，2002年度からは本誌もこの傘下から出版される予定であり現在準備中である．これを契機として，これからは，投稿論文数の増大，より幅広い光科学技術分野の論文の掲載，論文内容の質的向上，グローバル化をにらんだ積極的な広報活動，サーキュレーションの拡大などに取り組む予定である．したがって，できるだけ今までに投稿のない分野からの特集企画をたて掲載内容の幅を広げていきたいと考えている．ちなみに2001年度のVol. 8では，ODF 2000 (2nd International Optical Design and Fabrication) およびICOSN 2000 (2nd Joint OSJ-SPIE Conference on Optical Engineering for Sensing and Nanotechnology) 関連の論文の特集を計画している．

3.　研究グループの活動

(1)　位相共役・光波ミキシング研究グループ (Topical Group on Phase Conjugation and Wave Mixing)

位相共役・光波ミキシングは光波シンセシスグループへと継承し発展的に解消した．

(2)　イメージサイエンス研究グループ (Image Science Group)

・Optics Japan 2000提案型シンポジウム「コンピューター援用によるイメージサイエンス」の開催（一般講演12

件).

・ISG NEWLETTER 26の発行.

・インターネット上でのISG FORUMによる討論，情報交換.

・春季・秋季インフォーマルミーティングの開催.

・会員数182名.

(3) 近接場光学研究グループ (Near Field Optics Group)

第9回研究討論会を(6月，浜松市研究交流センター)を開催した．参加者は70名で，発表講演件数18件（うち，招待講演1件，ショート講演2件）であり前回までと同様の盛況であった．特に招待講演では生体機能分子研究への近接場光学の応用が取り上げられ，将来の方向を示す興味深い講演を聞くことができた．なお，すぐれた発表に対して授与する近接場光学賞については3件が受賞した．第4回トピカルミーティング(12月，主題「近接場光を用いて何がわかるか，何ができるか」，淡路島洲本市)を2泊3日で行った．参加者は23名であった．参加者が少ないのは，集中討論するために参加登録者数を制限したためである．少数参加者により，きわめて密度の濃い自由討論ができた．参加者からも非常に有意義であったとの感想が寄せられた．

なお，この他，日本光学会の50周年記念事業の中で，近接場光学に関する研究動向などを整理した内容のCD-ROM化については，近接場光学研究グループの幹事，運営委員が協力して作業を進めるむねの，打ち合わせを行った．

(4) 光波シンセシス研究グループ (Research Group on Lightwave Synthesis)

位相共役・光波ミキシングを発展的に解消し，これを継承するかたちで光波シンセシス研究グループを2000年度に新たに発足した．光応用のニーズを探り，目的のために最適な光波の「シンセシス」に関する研究活動を行う．第1回研究会を12月6日に東大生研で行い，約50名の参加があった．年会費は徴収せず，登録会員制をとっている．現在会員数は約60名である．

(5) コンテンポラリーオプティックス研究グループ (Contemporary Optics Group)

平成12年3月10日上智大学にて，第10回研究会「21世紀における光技術の展望と光学研究者のありかた」を開催した．プログラムは以下のとおりであった．1.「一女性科学者の悩みと喜び」(学芸大　大井みさほ)，2.「本郷村で15年，四谷村で32年，光学とともに歩んで」(上智大　石川和枝)，3.「高速半導体エレクトロニクス：光と電子の相互作用」(東大　神谷武志)，4.「超高速時空間フォトニクス情報返還・伝送システム」(阪大　一岡芳樹)，5.「科学技術と女性：未来に向けての提言―期待と役割」(司会：学芸大　大井みさほ，パネラー：筑波大　伊藤雅英，富士通　今井元，理研　岡本隆之，東工大　塚田由紀，オリンパス　槌田博文，東芝　平尾明子)，参加者約50名．また，平成12年10月9日北見工業大学においてOptics Japan 2000インフォーマルミーティングとして実行委員会を開催した．

(6) 視覚研究グループ (Vision Research Group)

応用物理学会講演会の発表に関するテクニカルミーティングとOptics Japan 2000の発表に関するインフォーマルミーティングの計2回の研究討論会，ならびに国外の研究者による特別講演会（視覚研究グループ主催，電子情報通信学会・日本視覚学会・映像情報メディア学会・日本色彩学会協賛)1回を開催した．テクニカルミーティング参加者は22名，インフォーマルミーティングは43名の参加者があり，これらの会の目的である十分な議論に適しており成果があった．

(7) 生体医用光学研究グループ (Biomedical Optics Research Group)

第1回生体医用光学研究会を平成12年7月24～25日，東北大工学部青葉記念会館で開催．一般講演43件，国際会議報告3件，参加者約70名．初日の夕方に懇親会．2日間とも活発な討論がなされ，Biomedical Optics分野で初の国内研究会は成功裏のうちに終了した．また，本研究グループのメーリングリストを作成し（約90名)，グループメンバー間で自由に情報交換ができる状態にある．

(8) 光コンピューティング研究グループ (Group of Optical Computing)

光コンピューティング研究グループは会員数107名（3月現在）で，本年度は4回の研究会と4号の機関誌(Opcom News)を発行した．第90回研究会は，2月4日に筑波大で開催し，参加者数は18名であった．第91回研究会は7月6～8日に京都市大原山荘で合宿形式で開催し，参加者数は28名であった．第92回研究会は11月1日に大阪科学技術センターで開催し参加者数は8名であった．第93回研究会は12月5日にNTT厚木研究開発センターで開催し参加者数は32名であった．

(9) 光設計研究グループ (Optics Design Group)

研究会開催

・第20回研究会「第2回光学設計論文賞講演/回折光学系」日時：2000年2月25日，会場：松下電器厚生年金基金松心会館，参加者80名．

・第47回応用物理学関係連合講演会シンポジウム「新しい世紀を迎える光設計」の企画．日時：3月30日，会場：青山学院大青山キャンパス，参加者約200名．
・第21回研究会「デジタル機器を支える光学系」．日時：5月25日，会場：東大生研，参加者113名．

国際会議の開催

・2nd International Conference on Optical Design and Fabrication (ODF 2000, Tokyo)．日時：2000年11月15～17日，会場：早大国際会議場，参加者：113名．

第3回光設計賞実施

会誌発行：「OPTICS DESIGN」No. 20，21

会員数：個人会員280名，特別会員15機関，賛助会員10社

(10) 微小光学研究グループ (Group of Microoptics)

平成12年度は4回の微小光学研究会を開催し，その予稿集としてMicrooptics News Vol. 18, No. 1～4を発行した．また，6月に第12回微小光学特別セミナーを開催した．

・第75回研究会（3月10日，早大理工学部「自動車・船舶・列車・航空機における微小光学技術の応用」講演数13件，参加者87名）
・第76回研究会（7月4日，東大生研「デジタル技術と微小光学」講演数12件，参加者65名）
・第77回研究会(9月22日，東工大「次世代ネットワークと光スイッチング」講演数10件，参加者138名）
・第78回研究会（12月1日，大阪大「21世紀をひらくレーザー技術」講演数10件，参加者76名）
・特別セミナー（6月1，2日，石垣記念ホール「微小光学の先端技術～その市場性と競合技術」講演数14件，参加者118名）

(11) ホログラフィックディスプレイ研究グループ (Holographic Display Artists and Engineers Club)

第1回(6月2日，多摩美大，参加者：約30名，テーマ：「21世紀に向けたホログラフィの将来を探る」)，第2回（9月1日，湘南工科大，参加者：約30名)，第3回(11月30日，立命館大びわこ草津キャンパス，参加者：約30名)，第4回（3月9日，東工大長津田キャンパス，テーマ：「ホログラフィと映像メディア」）の研究会を開催した．また，研究会会報（HODIC Circular）の発行（4回)，3次元画像コンファレンスの協賛，HODIC鈴木・岡田賞の選考および贈呈，展示会開催，海外のホログラフィー研究グループとの交流等の活動を行った．

4. 会　　計

予算担当会計幹事　埜田　友也

平成12年度の決算状況を，予算と対比して報告いたします．

平成12年度の予算は，光学会資料室の設置および運営を新しく盛り込んだかたちで組まれました．

会誌「光学」事業では，前年度分の決算が含まれたことにより収入・支出とも増えていますが，ほぼ予算通りの収支状況となっております．

会誌「OPTICAL REVIEW」事業では，ほぼ予算通りに収支決算が行われております．

講習会・講演会事業も，本年も順調であり収支も良好でした．国際会議の決算が年度をまたがったことから，支出はその他事業費枠として計上いたしております．

光学資料室関連では，敷金，賃借料，備品代として約450万の支出となり予算に対し約200万円の支出減少となりました．

予算と大きな差が生じているのは，管理費のところです．内部留保金の取り扱いとして，応用物理学会の依頼により，特定預金として支出いたしました．このため，今年度収支は約3800万円の赤字となっております．全体としては，特定預金の支出分を考慮した収支では，約210万円の黒字となっております．

平成13年度では，2回目となるSPIEと共催の国際会議ICOSN 2001が開催されるため事業収入および支出が国際会議相当分，増額してあります．国際協力の活性化を目的として，国際協力支援金が新設され100万円を計上しております．これにより，海外からの講演者・会誌投稿などにかかる負担を軽減し，各事業の予算設定がより健全化するものと思います．また，50周年記念事業に関してCD-ROM制作費，「光学」印刷補助費等250万円を新たに計上しております．

平成12年度より，光学会資料室が運営されております．こちらも積極的な利用をお願いいたします．

平成12年度事業報告/平成13年度事業計画

	平成12年度事業報告(平成12年1月1日～12月31日)	平成13年度事業計画(平成13年1月1日～12月31日)
1．会誌の発行	「光学」 Vol. 29, No. 1～12	「光学」 Vol. 30, No. 1～12
2．欧文誌の発行	「OPTICAL REVIEW」 Vol. 7, No. 1～6	「OPTICAL REVIEW」 Vol. 8, No. 1～6
3．その他	日本光学会資料室開設	
4．光学論文賞，日本光学会奨励賞の受賞	光学論文賞 ・興梠　元伸（東京工業大学総合理工学研究科） ・栗木　一郎（科学技術振興事業団戦略的基礎研究推進事業） 日本光学会奨励賞 ・有本英伸（大阪大学工学研究科）	光学論文賞 日本光学会奨励賞
5．講演会，講習会	第26回冬期講習会「超短パルス光学」 1月17～18日 90名 第33回光学五学会関西支部連合講演会 5月26日 37名 第25回光学シンポジウム「光学システムおよび光学素子の設計，製作，評価を中心として」 6月22～23日 31件 268名 3次元画像コンファレンス2000 7月5～6日 300名 第34回サマーセミナー「世の中を変える光技術」 8月24～26日 52名 Optics Japan 2000（北海道，北見工大） 10月7～8日 190件 313名 北陸信越講演会（新潟大） 11月1日 71名 カラーフォーラムJAPAN 2000 11月15～17日 平成12年度名古屋講演会「中部フォトニクスにおける最近の話題」 12月11日 29名 平成12年度関西講演会「次次世代光ディスク技術」 12月18日 57名	第27回冬期講習会「フォトニック結晶と極微周期構造の光学」 1月15～16日 115名 第34回光学五学会関西支部連合講演会 2月9日 91名 ICOSN 2001 6月6～8日 第26回光学シンポジウム「光システムおよび光素子の設計，製作，評価を中心として」 6月21～22日 第35回サマーセミナー「ITを支える光技術」 8月30～9月1日 Optics Japan 2001（早稲田大学） 11月5～7日 北陸信越講演会（新潟大） 11月 カラーフォーラムJapan 2001 11月 平成13年度関西講演会 11月 平成13年度名古屋講演会 12月
6．研究グループ	イメージサイエンス，位相共役・光波ミキシング，コンテンポラリーオプティックス，近接場光学，視覚，光コンピューティング，光設計，生体医用光学，ホログラフィックディスプレイ，微小光学，光波シンセシス	イメージサイエンス，微小光学，光波シンセシス，コンテンポラリーオプティックス，近接場光学，視覚，光コンピューティング，光設計，生体医用光学，ホログラフィックディスプレイ
7．幹事会，委員会	幹事会 3回 常任幹事会 3回 「光学」編集委員会 6回 光科学および光技術調査委員会 5回 光科学および光技術調査委員会（関西） 3回 「OPTICAL REVIEW」編集委員会 1回 「OPTICAL REVIEW」出版委員会 2回	幹事会 3回 常任幹事会 3回 「光学」編集委員会 6回 光科学および光技術調査委員会 5回 光科学および光技術調査委員会（関西） 3回 「OPTICAL REVIEW」編集委員会 1回 「OPTICAL REVIEW」出版委員会 2回
8．会員数	平成12年12月末日現在（(　) 内は昨年度） A会員 739名 (764名) B会員 1182名 (1170名) 特別会員 214口 (290口) 賛助会員 82社141口 (85社145口)	

平成12年度収支決算

〈収入の部〉　　平成12年1月1日～12月31日

大科目	中科目	金額	内容（金額記入）
会費収入		24,096,900	
	会費収入	24,096,900	
事業収入		32,189,930	
	講習会，講演会収入	12,645,274	サマーセミナー 956,000/冬期講習会 1,060,200/Optics Japan 7,677,295/その他 0/光学シンポジウム 1,472,700/国際会議 1,479,079
	会誌出版事業収入「光学」	9,186,800	別刷代収入 2,303,800/広告料収入 6,825,000/懇親会費 58,000
	会誌出版事業収入「OPTICAL REVIEW」	9,273,956	別刷代収入 9,273,956/購読料 0/科研費補助金収入 0
	その他事業収入	1,083,900	名簿出版事業 984,900
雑収入		292,708	
	受取利息	22,488	
	雑収入	270,220	バックナンバー，資料コピー代
引当金戻入		107,600	
	回収不能引当金戻入	107,600	
繰入金収入		12,783,059	
	分科会賛助会費還元金	4,608,000	40,000×80%×144 口
	分科会給与補助	8,175,059	学会担当者分
当期収入合計		69,470,197	
前記繰越収支差額		62,085,223	
収入合計		131,555,420	

〈支出の部〉

大科目	中科目	金額	内容（金額記入）
講習会，講演会事業費		11,042,344	
	臨時雇賃金	952,480	サマーセミナー 28,000/冬期講習会 40,000/Optics Japan 851,200/その他 0/ 光学シンポジウム 33,280/国際会議 0
	印刷製本費	3,785,015	サマーセミナー 309,278/冬期講習会 252,765/Optics Japan 2,747,927/その他 0/ 光学シンポジウム 475,045/国際会議 0
	諸経費	6,304,849	会議費 0/56,091/600,183/5,277/142,150/0，旅費交通費 514,700/2,160/485,870/30,000/37,980/0，通信運搬費 28,480/18,410/132,458/0/83,430/0，消耗品費 0/1,092/227,728/0/3,559/0，賃借料 33,500/0/560,996/0/0/0，諸謝金 443,686/295,484/599,976/59,996/127,975/0，雑費 9,402/210/515,245/55,000/420/0，懇親会費 51,797/63,876/1,009,288/0/116,395/0，封筒代 0/0/4,920/0/5,115/0
会誌出版事業「光学」		23,971,318	
	印刷製本費	11,502,484	組版代 3,650,535/製版代 1,298,741/刷版代 896,070/印刷代 1,214,850/製本代 912,240/別刷印刷代 1,151,304/用紙代 2,342,203/一般印刷製本費 36,541/広告印刷費 0
	郵送費	3,784,853	
	諸経費	8,683,981	会議費 392,403/編集委旅費交通費 17,000/その他旅費交通費 1,983,826/通信運搬費 528,782/消耗品費 0/賃借料 54,350/臨時雇賃金 0/業務委託費 5,700,000/諸謝金 0/雑費 7,620
会誌出版事業「OPTICAL REVIEW」		11,056,156	
	印刷製本費	5,568,504	組版代 2,445,030/製版代 464,623/刷版代 285,075/印刷代 572,775/製本代 459,333/別刷印刷代 447,929/用紙代 830,739/一般印刷製本費 63,000/広告印刷費 0
	郵送費	1,605,783	
	諸経費	3,881,869	会議費 30,000/その他旅費交通費 0/通信運搬費 386,404/消耗品費 0/賃借料 0/臨時雇賃金 0/業務委託費 2,902,340/諸謝金 0/雑費 0/英文校閲料 563,125/ホームページ作成費 0
その他事業費		2,625,989	
	助成金支出	400,000	
	補助金支出	0	
	名簿作成費	0	
	諸経費	2,254,574	一般印刷製本費 1,048,723/その他旅費交通費 458,780/封筒代 28,585/賃借料 0/通信運搬費 702,767/会議費 0/雑費 15,719
管理費（含 幹事会）		56,155,391	
	給与手当	8,175,059	学会担当者負担
	一般印刷製本費	26,568	諸印刷代，資料コピー代
	ホームページ製作費	0	
	敷金・保証金	1,420,200	
	特定預金	40,000,000	
	諸経費	5,666,374	臨時雇賃金 18,000/会議費 151,430/その他旅費交通費 1,214,220/消耗品費 600,023/賃借料 2,824,795/懇親会費 194,250/電話料 33,393/通信運搬費 79,545/諸謝金 65,305/雑費 321,230/租税公課 124,083/振替手数料 3,350/製本代 36,750/封筒代 0
	回収不能引当金	817,000	
繰入金支出		2,091,450	（他会計への支出額）
	学会事務費	2,091,450	事務手数料
予備費		0	
当期支出合計		106,971,233	
当期収支差額		−37,501,036	
次期繰越収支差額		24,584,187	

平成13年度収支予算

〈収入の部〉　　平成13年1月1日～12月31日

大科目	中科目	金額	内容（金額記入）
会費収入		21,928,000	
	会費収入	21,928,000	A，B会員 1755名×9,600，学生会員 55名×6,000，特別会員A 110社×15,000，特別会員B 50社×30,000，特別会員C 40社×40,000
事業収入		33,063,300	
	講習会，講演会収入	15,869,300	サマーセミナー 1,296,000，冬期講習会 1,018,300，Optics Japan 2,250,000，光学シンポジウム 1,020,000，国際学会 10,285,000
	会誌出版事業収入「光学」	8,500,000	別刷代収入 2,500,000，広告料収入 6,000,000
	会誌出版事業収入「OPTICAL REVIEW」	8,694,000	投稿料収入 6,480,000，別刷代収入 864,000，科研費 1,350,000
	その他事業収入	0	一般会計寄付金
雑収入		350,000	
	受取利息	80,000	
	雑収入	270,000	バックナンバー，資料コピー代
引当金戻入		0	
	回収不能引当金戻入	0	
繰入金収入		12,884,000	
	分科会賛助会費還元金	4,640,000	40,000×80%×145 口
	分科会給与補助	8,244,000	学会担当者分
当期収入合計		68,225,300	
前記繰越収支差額		24,584,187	
収入合計		92,809,000	

〈支出の部〉

大科目	中科目	金額	内容（金額記入）
講習会，講演会事業費		17,014,000	
	臨時雇賃金	2,262,000	サマーセミナー 50,000，冬期講習会 50,000，Optics Japan 630,000，光学シンポジウム 32,000，国際学会 1,500,000，その他 0
	印刷製本費	4,165,000	サマーセミナー 370,000，冬期講習会 295,000，Optics Japan 500,000，光学シンポジウム 300,000，国際学会 2,700,000，その他 0
	諸経費	10,587,000	会議費 100,000/95,000/550,000/230,000/200,000/0，旅費交通費 702,000/70,000/90,000/15,000/1,000,000/0，通信運搬費 60,000/20,000/100,000/50,000/400,000/0，消耗品費 10,000/6,000/100,000/10,000/200,000/0，賃借料 25,000/0/90,000/200,000/2,900,000/0，諸謝金 300,000/527,000/40,000/175,000/150,000/0，雑費 1,000/1,000/150,000/10,000/0/0
会誌出版事業「光学」		17,138,000	
	印刷製本費	7,200,000	
	発送通信費	2,822,000	
	諸経費	7,116,000	会議費 90,000，旅費交通費 1,070,000，通信運搬費 330,000，消耗品費 50,000，賃借料 78,000，編集委託費 4,560,000，諸謝金 938,000，雑費 0
会誌出版事業「OPTICAL REVIEW」		9,662,000	
	印刷製本費	5,400,000	
	発送通信費	1,472,000	
	諸経費	2,790,000	会議費 60,000，旅費交通費 150,000，通信運搬費 220,000，消耗品費 0，編集委託費 2,280,000，賃借料 40,000，英文校閲料 40,000
50周年記念事業		2,500,000	
	印刷製本費	2,000,000	CD-ROM製作費，「光学」印刷補助費
	諸経費	500,000	会議費 200,000，旅費交通費 0，通信運搬費 0，臨時雇賃金 0，賃借料 200,000，消耗品費 100,000，雑費 0
その他事業費		1,660,000	
	助成金支出	1,660,000	関係先補助金等，研究グループ
国際協力支援金		1,000,000	
	旅費補助	500,000	
	投稿料補助	500,000	
管理費（含 幹事会）		15,532,000	
	給与手当	8,244,000	学会担当者負担
	印刷製本費	150,000	諸印刷代，資料コピー代
	賃借料	3,000,000	
	諸経費	3,318,000	臨時雇賃金 50,000，会議費 100,000，旅費交通費 750,000，消耗品費 50,000，資料室維持費 500,000，通信運搬費 350,000，諸謝金 0，雑費 200,000，消費税 304,000，振替手数料 14,000，ホームページ費 1,000,000，
	回収不能引当金	820,000	
繰入金支出		2,109,000	（他会計への支出額）
	学会事務費	2,109,000	事務手数料
予備費		100,000	
当期支出合計		66,715,000	
当期収支差額		1,510,000	
次期繰越収支差額		26,094,000	